

# 発達に気がかりがある子どもが楽しく運動を継続するための コラボレーション型支援体制の試み

澤 聡美 水野カオル 松澤あかり

# 発達に気がかりがある子どもが楽しく運動を継続するための コラボレーション型支援体制の試み

澤 聡美<sup>1</sup> 水野カオル<sup>2</sup> 松澤あかり<sup>3</sup>

## Development of a Collaboration-based Support System for Children with Developmental Difficulties to Enjoy Performing Exercise

Satomi SAWA · Kaoru MIZUNO · Akari MATSUZAWA

### 摘要

近年、保育所や学校などの集団の中で「騒ぐ、落ち着かない、話が聞けない」といった発達に気がかりがある子どもが増加しており (1)、放課後や休日に運動できる場所や体を動かしてストレスを発散できる運動に関する支援の充実が求められている。そこで本稿では発達に気がかりがある子ども達が地域において、楽しく運動を継続するためのコラボレーション型支援体制 (2) の構築と遊び場づくりを目指し、一般社団法人PonteとやまWAKUWAKUサークル「ここからだのプログラム」で行ってきた取り組みについての実践を省察することを目的とする。

**キーワード** : 発達に気がかりがある子ども, 楽しい運動あそび, コラボレーション型支援体制

**Keywords** : Children with Developmental Difficulties, Enjoy Performing Exercise, Collaboration-based Support System

### I. はじめに

近年、保育所や学校などの集団の中で「騒ぐ、落ち着かない、話が聞けない」といった発達に気がかりがある子どもが増加している (1)。通常学級においても多くの教師が発達障害のある子どもや発達障害の存在が疑われる子どもが増加していると感じている (3)。発達に気がかりがある子どもたちは通常の学童保育や習い事に馴染むことが難しいなど、学校外の居場所や過ごし方にも悩むケースが多くある。子どもたちの能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し、社会参加するために必要な力を培うため、一人一人の教育的ニーズを把握し、特別な配慮の下に適切な教育を行う必要がある (4)。厚生労働省によると、保育所における障害のある子どもの数は増加傾向 (5) にあり、子どもの発達に応じた放課後デイサービスのニーズが増え、内容の充実が求められている。さらに放課後や休日に発達に気がかりがある子どもが運動できる場所や体を動かしてストレスを発散できる運動に関する支援の充実も求められている (6)。

著者の一人 (澤) は 15 年間幼稚園や保育園で運動指導を行ってきたが、数年前から園を訪れる度に運動あそびに参加できない子どもや、ぎこちない動きの子どもに出会うようになり、その度に特別支援の専門家に事例を相談し、内容や方法を工夫してきた。平成 29 年 3 月に

告示された新学習指導要領体育科 (7) では改定ポイントとして「運動を苦手と感じている児童や運動に意欲的に取り組まない児童、障害のある児童等への指導についての配慮」が記載されている。さらにこれからの知識基盤社会 (8) において「チーム学校」として、それぞれの専門性を生かし連携・分担して協働的に取り組むことが目指されている。そこで「子ども達が楽しく継続して運動あそびに参加できる場をみんなで創る」という 1 つの目標に向かい、専門家が経験と理論と智恵を持ち寄り、協働できる支援体制を創りたいと考えた。

著者の一人 (水野) は、21 年間、特別支援学校、特別支援学級の教員として、様々な障害や困難を抱える子どもたちと過ごしてきた。そして 2014 年に一般社団法人 Ponte とやま (以下 Ponte とやまとする) を設立した。生きづらさを抱えている子どもたちや若者たち、その家族が自分らしく安心して生きていける地域作りを目指し、それぞれが自信を持って成長していくための体験の場、居場所と仲間、必要な学びのチャンス等とともに作っていくことを主な活動としている。これまでの実践の経験からプログラムの内容を考えたり実行したりすることは可能であるが、地域作りを目指すという視点に立った時、“地域のその道のプロ”との連携や協力ということを大切にしたいと考えた。Ponte とやまでは『WAKUWAKU サークル』と称し、様々な体験の場を

<sup>1</sup> 富山大学人間発達科学部 <sup>2</sup> 一般社団法人 Ponte とやま <sup>3</sup> 株式会社 バローホールディングス

提供している。その一つ「こころとからだのプログラム」では楽しく身体を動かすことを通して、身体意識、運動能力、コミュニケーション力等の向上を目指している。

そこで本稿では地域において、発達に気がかりがある子どもが楽しく運動を継続するための「コラボレーション型支援体制」(2)の構築と遊び場づくりを目指し、一般社団法人PonteとやまWAKUWAKUサークル「こころとからだのプログラム」(以下Ponte運動教室とする)で行ってきた取り組みについての実践を省察することを目的とする。

## II. 方法

### (1) 支援体制の構築

支援体制として体育科教育学、特別支援教育、運動あそびの専門家、そして子どもや保護者がコラボレートする仕組み作りを行った(図1)。

### (2) 運動あそびの実施日と場所

Ponte運動教室は2016年3月から月に1~2回開催している。対象者は発達に気がかりがある幼児から社会人とその保護者であり、開催日に参加できる人が来るため参加者の年齢や人数は一定ではない。開催場所は主に富山大学の第2体育館(富大体育館)、学生会館ホール(富大ホール)、太閤山コミュニティセンター(太閤山)、富山西部体育センター第2トレーニング室(西部)、富山市民芸術創造センター(芸創)であった。参加場所は富山大学を中心にPonteとやまに入会している方々が集まりやすい場所に出向くことを心がけた。平成29年8月までの開催日と場所は以下のとおりである。

第1回	平成28年3月12日(太閤山)
第2回	平成28年5月14日(富大ホール)
第3回	平成28年6月18日(太閤山)
第4回	平成28年7月2日(富大体育館)
第5回	平成28年9月10日(富大体育館)
第6回	平成28年10月15日(富大ホール)
第7回	平成28年11月12日(富大ホール)
第8回	平成29年12月4日(富大ホール)
第9回	平成29年1月29日(富大ホール)
第10回	平成29年2月18日(富大ホール)
第11回	平成29年3月5日(富大ホール)
第12回	平成29年4月15日(太閤山)
第13回	平成29年4月23日(西部)
第14回	平成29年5月13日(富大体育館)
第15回	平成29年6月17日(太閤山)
第16回	平成29年6月25日(西部)
第17回	平成29年7月8日(太閤山)
第18回	平成29年7月16日(西部)
第19回	平成29年8月19日(芸創)

### (3) 運動あそびの場づくりと内容

発達に気がかりがある子どもたちの問題は、コミュニケーションの困難さや周囲とのかかわりにくさに注目されることが多いが、不器用さ、姿勢の悪さ、筋力の弱さ、感覚過敏(あるいは鈍麻)、睡眠など「からだ」に関する課題も大きい。例えば、睡眠障害があることにより、朝起きられないので学校に行けない、学習に集中できないというような状況を招いてしまう。「からだ」に関する課題への取り組みは、子どもたちが将来自立的に生きていくために大切な支援の一つであると考えられる。

しかし、発達に気がかりがある子どもたちの多くは、怖がりであることも多く、環境に慣れることに時間を要する。そのため、「やってみたい」気持ちはあるものの、様子を見たりどうしてよいかわからず戸惑ったりしている間に活動が終わってしまい、参加することすらできず、体験の機会が奪われてしまうということがしばしば起こる。結果、身体を動かすこと自体嫌いになったり、自分は運動が苦手だと自信をなくしたりしがちである。

そこで子どもたちが活動を楽しみながら、自分の身体に気づき、自らの意思で環境に働きかけ、様々なことを獲得していくことができるような場づくりを目指していきたいと考えた。

運動あそびのプログラムは、体育科教育学の専門である澤が幼児教育の現場で15年間行ってきた運動指導実践内容から、運動が苦手な子どもや発達に気がかりがある子どもたちを対象とした運動にはどのような運動あそびがふさわしいかを検討し、基本の運動スキル(9)全般を体験できるように、以下①~③を運動プログラムの内容を柱とした。

- ①移動系と平衡系の運動スキルを動物に変身しながら楽しい運動を促す柳沢運動プログラム(10)(図2)
- ②ニュージーランドの感覚・認知運動(1)
- ③運動の発達の特徴(9)を考慮し、粗大運動と微細運動を組み合わせて行うこと(写真1)や集中力を促せるように動的な運動と静的な運動を組み合わせて行うような構成にした(11)(12)。

①柳沢運動プログラムの基本(10)(図2)は主に跳躍運動・支持運動・懸垂運動の3つである。跳躍運動はカンガルーやうさぎを模倣し、両足をそろえてジャンプするという運動である。まずは脚を中心に運動した後に手と脚を協調させた運動に発展するように遊びを展開し、長縄や短縄の連続跳びを目指した。支持運動は腕で体を支える力や体幹を意識させる運動で犬、熊、カエル等を模倣し、手のひらをしっかり開き、顔を上げることを促した。さらに跳び箱の開脚跳びに繋がるように脚を開き、手をつけて体を支えることができるように股関節の柔軟等も取り入れた。懸垂運動はぶら下がる力で、ブタの丸焼、ツバメ等を模倣し、鉄棒のぶら下がり遊びをしながら身につけていくよう促した。回転動作(1)は

脳の前庭系を発達させる動作である。前庭系はバランスをとる役割があり、子どもの感情や筋肉の発達、視覚、言語、覚えたり集中したりする能力についても不可欠な役割を果たす。ゆっくり揺れたり、くると回転したり、逆さまにぶら下がったりといった動きは、脳の前庭系を発達させる基本動作である。さつまいもを模倣し、両手を伸ばして寝転がり横に回転する動作や、親子で脚を開いて座った状態で手をつなぎ、前後、左右に揺れるコーヒークップやギットンバトン等を行った。

②感覚・認知運動では、バケット理論(1)の「目と手、目と足の協調」を身につけるスカーフ遊びを行った。「目と手の協調」は目と手を一緒に使う能力のことで、文字を書いたりホワイトボードに書かれたものをノートに書き写したりするとき必要な力でもある。投げたスカーフを目で追ってつかむことは、目と手を協調する練習となり、さらにスカーフを飛ばした方向に移動するので目と全身の協調にもなる。保護者がスカーフを持ち、前後左右にスカーフを移動させ、そのスカーフにタッチするスカーフタッチや、スカーフを投げ上げ、様々な体の部位でキャッチするスカーフキャッチ等を行った。多くの子どもがスカーフの色や素材に大変興味を持ち、スカーフを使った遊びを好んだためスカーフの操作に慣れてきたところで、操作系の運動スキルを促す目的でスカーフを用いた表現遊びを行った。スカーフを持って左右に回す、上下、左右に大きく振る、お腹と背中 of 感覚を促すためにお腹周りや背中を拭くような動作を行う、自分で投げキャッチする等、様々な日常動作や操作系の運動に繋がる動作を音楽のリズムにあわせて行った。

③粗大・微細運動の一例は「スイカリングゲーム」と「雪だるまを創ろう」である(図3)。運動あそびを展開していくうちに、子どもたちは指先を使って、つまむ、破る等の操作が苦手であると感じた。指先を使ってつまむ等の微細運動(1)は、学校や社会生活で必要な書く力の、初歩的な動作につながるとされている。まずは粗大運動である「スイカリングゲーム」を行い、しゃがんで、つまんで、めくる、3つの粗大運動を行うゲームを行った。丸く切ったダンボールの表にリング、裏にスイカが描かれており、最初は半数ずつエリア内(畑)に置く。スイカチームとリングチームに分かれ、「よーいドン」で自分のチームの果物(スイカかリング)でエリアをいっぱいにするという単純なルールであるが、自分はどちらのチームなのか、やってはいけないことは何かなどルールをしっかり理解しなければならない。このように全身を使って楽しく運動した後、微細運動として「雪だるまを創ろう」を行った。鼻しか描かれていない雪だるまの用紙に様々な表情の目玉シールや飾りのシールから、自分の好みのものを貼って飾りつけるという、作品作りを行った。

#### (4) 運動を楽しく、継続するための工夫

PonteのWAKUWAKUサークルは、療育的な視点を持ちつつも、療育の場としてではなく、子どもたちの日常や地域の中で違和感のない場にしたいと考えた。年齢や実態が様々なうえ参加者が固定していない活動であるため、目標設定の仕方や活動を絞り込むことが難しいという面はあるが、逆に自由で強制力がない雰囲気が作り出しやすいというよさもある。

特別支援の専門家である水野は保護者と子どもの関係を見守り、支援することを心がけた。子どもたちの活動にかかわる際、保護者の参加の仕方には気を配るようにしている。保護者の多くは、子どもが嫌がっていても「やらせよう」とさせがちである。上手にできるようにと、必要以上に声をかける保護者も多い。Ponteでは、保護者に「大人はいろんな意味でのお手本、模範であってほしい」と伝えている。怖がりな子どもは大概の場合、はじめは「やらない」と言う。この場合の「やらない」は、「よくわからない(から不安)」「自信がない」「ちょっと見ていたい」というような気持ちが込められていることが多い。保護者や指導者が「なんでやらないの」と問いただし、「ちゃんとやろう」と無理強いすると、かえって逆効果である。保護者には、子どもの「ことば」に引きずられるのではなく、親自身が楽しく活動するようにしてもらおう。自分のお父さんやお母さんが楽しそうにやっている様子を見ているうちに、多くの子どもたちは自然と活動に加わるようになっていく。

また、子ども達が日常生活の遊びの中から意欲を持てるような遊びや運動がより効果的である(1)ことから、本実践では運動を「訓練」や「練習」ではなく、「楽しみ」と感じられるように、運動が得意な大学生を、先生という存在ではなく、子ども達と一緒に運動する仲間といった雰囲気を大切にしたい。お兄さんやお姉さんに関心を持ってもらうようなチラシを配布し(写真1)、運動あそびの専門家として子どもと一緒に遊びながら、いいお手本になるように努めた。

さらに運動の習得には繰り返し行うことが大切である。Ponte運動教室には運動が苦手な子どもが多く参加することが予想されたことから、子ども達が「できそう」と思えるようにスモールステップ化し、「できるようになったことを繰り返し、少しずつ新しいことにチャレンジする」を大切に、子どもたちの参加意欲を促進するための支援ツールや運動の継続につながる工夫を取り入れた。

刀根(13)は視覚的に整理された環境での学習活動は、指示が通りやすく、子どもの「できた」という感覚が「もっとしたい」という意欲につながることを期待できると報告している。また柳沢(10)は大人が子どもと同じレベルになって一緒に動くことの重要性を指摘し、子どもは見たものに対して反応し、動くものに惹き付けられるため、大人が楽しそうに体を動かしていればついてくることや、この集中力が学校で先生の話の話を聞くとき

や課題に取り組むときのための子どもの大事な能力になると述べている。「どうぶつ歩き」は子ども達の意欲を引き出し、理解を促すために視覚支援ツールとして、動物の絵を描いたパネルを作成し使用した(図4)。子ども達の興味関心を引き出し「よく見る」、「やってみる」、「コツがわかる」という動作を繰り返し楽しく実践できるように工夫した。

そして、参加意欲を促進するための方法としてオペラント強化法(14)を用い、シールラリーを行った。オペラント強化法とは、与えられた課題を達成することで褒美をもらい、課題への取り組みや意欲がアップし継続につながるという方法である。平成28年度はラジオ体操カードを参考に、運動教室に参加する度にカードにシールを一枚貼り付け、シールを3枚集めるカードを作成した。平成29年度は昨年の子ども達とのやり取りをもとに参加者の好きな電車を取り入れたシールカードを作成した(写真2)。

### Ⅲ. 実践と省察

#### (1) 運動あそびの実践と省察

##### 1) 基本運動

「どうぶつ歩き」では、最初はマットで「どうぶつ歩き」用のエリアを作り、その中を一方通行に移動させた。動物の動きの説明が長くなると、子ども達の集中力が切れた様子が見られたため、第2回以降は子どもの理解を促すために視覚支援として動物の絵を描いたパネルを使用した。パネルを提示することで、子ども達の注目を集めることができた。また、範囲や方向を限定するのではなく自由に動き回れるようにして、子ども達の待つ時間が少なくなるように工夫し第4回までは同様に行った。繰り返し行ってきたことにより、第4回頃からの動きも上達が見られ、特にカエルの動きが上達する子どもが多くいた。一方で、保育園や幼稚園で運動教室を行う時の子ども様子よりも、短い距離ですぐに疲れ、着いている膝を痛がる子どもが多くいたことから、運動スキルを意識した動物だけではなく、ゴリラ(ウホウホッと言って胸を叩きながら走る)やイカ(しゃがんだ姿勢から手足を上へ伸ばして伸びる動作をしながら移動する)等、表現を重視する動物を取り入れることにした。特にゴリラは子ども達がとても好きな動作であり、徐々に子ども達の方から「こんな動きにしてみたい」「こんな動物したい」「動物カードを作ってきたよ」(写真3)という意見が出てくるようになり、動物のバリエーションが増えた。

##### 2) 感覚・認知運動

初めは各自一枚のスカーフを持ち、片手投げ、両手投げから始め、キャッチ方法に変化(手、足、頭、背、腹)をつけながら行った。スカーフは手から離れにくいいため、うまく投げられない子どもが多く、つまむことや放す

ことが難しい様子であった。その改善として、保護者が投げたスカーフを子どもがキャッチする親子活動にし、投げる動作と受ける動作を分解して行うようにした。また、第4回以降は握りやすく投げやすい新聞ボールを使用した遊びを行い、「つかむ・投げる」ことを意識的に取り入れた。さらに大きなビニール袋に7~8個の風船を入れ、数組の親子でラリーを続ける風船遊びを行い、目と手、目と足の協調動作を促す遊びを加えた。

このようにスカーフや新聞ボール、風船を用い、操作系の運動スキルを意識的に取り入れることで子どもの動きが上達していくと同時に、親子同士、お兄さんお姉さんとのコミュニケーションをとることが増えた。さらに音楽にあわせたスカーフダンスを毎回行うことで、子ども達の動きがスムーズに、よりダイナミックになり、音楽にも慣れて、気持ちよさそうに表現を楽しむ姿も見られるようになった。

#### 3) 粗大・微細運動

第1回では、スイカチームとリンゴチームに分かれて、時間内にどちらのチームの果物を多く残せるかというルールで45秒を2セット行った。参加は子どものみとした。勝ち負けにこだわる子どもが多く、負けが続くとゲームに対するやる気が低下したため次に大人対子どもでゲームを行い、「大人に勝つ」という明確な目標を与えた。また時間制を辞めて子どもの様子を見てゲームを切り上げることで、子ども達の集中力が継続した。第5回まで粗大・微細運動として「スイカリンゴゲーム」を行ってきたが、指先を使ってスイカやリンゴをめくる動作に慣れてきたことから、第6回は細かい微細運動として「雪だるまを創ろう」を取り入れ、シールを貼る細かい作業を行った。鼻しか描かれていない雪だるまの用紙に様々な表情の目玉シールや飾りのシールから、自分の好みのものを貼って飾りつけ、作品作りを行った。粗大運動を前半に行うことより微細運動をする頃には、子どもたちの有り余る体力やストレスが発散された様子で、どの子どもも集中して指先を動かしていた。これまでのしゃいで動き回っていた様子とは一変して、「雪だるまを作ろう」の説明もしっかりと聞き、シールを貼ることに集中することができた。粗大運動と微細運動を組み合わせることや動→静を意識したプログラム構成の効果を感じた。また、粗大運動に苦手意識を持つ子どもの中には「雪だるまを創ろう」から参加意欲を持ち始めた子どももいた。シールを貼り、自分の雪だるまを創れたという、「できた」という体験が自信に繋がり、次の回から運動にも徐々に参加できるようになった。発達の特徴からすれば粗大運動が先ではあるとされているが、粗大運動と微細運動を組み合わせることにより、子ども達一人ひとりの学習スタイルに寄り添うことができ、「ちょっとやってみようかな」というような気持ちを引き出すことができた。

Ponte 運動教室は参加者が固定していない為、初めての場所や初めての人に緊張し、活動に参加できない子どももいたが、第4回頃から「子ども達が活動に慣れてきた」という感じを主催者側も保護者側も持つことができた。人や環境にも慣れ、どの遊びにも上達が見られたことから繰り返し行うことが大切だと感じた。平成29年度からは初めて参加する親子が少しでも活動に入りやすい雰囲気をつくるために、最初の活動は保護者と一緒に運動を行うことにした。

親子活動により安心した雰囲気でスタートすること、基本運動、感覚・認知運動、粗大・微細運動を楽しく繰り返し行うこと、少しずつ新たな遊びを加え子ども達に新しい刺激と楽しさを与えていくことが重要だと考える。また、粗大運動と微細運動を組み合わせることで、子どもたちのやる気や集中力が高まり持続することが分かった。こどもプラス NPO 法人運動保育士会(12)は、「動」と「静」の活動を交互に繰り返すことにより、興奮を瞬時に抑制する力が高まり、動と静のメリハリにより強い抑制力を育てることができ抑制を先に行うより興奮を高める動作をした方が、結果的に集中する力が身につくやすくなると報告していることから、運動教室の終わりに静的な活動をすることは、聞く力や集中力を促すことができると考える。

## (2) 運動の継続を促す支援方法の省察

「どうぶつ歩き」では視覚支援としてパネルを使用したところ、説明に耳を傾けてくれる子どもが増え、遊びにも活気が出た。「色彩」に反応するという保護者の意見を取り入れ、パネルに描いた動物に色を塗ることで、子どもの聞く意欲と運動に取り組むモチベーションにつなげることができた。継続して教室に参加している子どもの中に、自分で考えた動物パネル(写真3)を創って持ってきてくれる子どもや、友達のパネルに反応して「こんな動物もあるよ。やってみたいな」と言う子どもも出てきた。このように子ども達のアイデアを積極的に取り入れ、運動への関心や参加意欲を促していきたいと考える。

## (3) 教室への参加意欲を促す支援方法の省察

運動教室への参加意欲を促進するためのシールラリーを開始し、教室に来た子どもにシールカードとシールを1枚配布した。初めは子ども達が好むキャラクターシールではなかったため、シール自体に興味をもっている子どもは少なかったが、シールをもらえることに対する反応は良く「シールがもらえた!」という子どもの声が多数あった。ポケモンやディズニーキャラクターのシールが特に人気で、小さいシールよりも大きいサイズのシールを好む子どもが多くいた。

保護者へのインタビューから、シールラリーが運動教室参加の動機になっている子どもがいることが分かっ

た。Aちゃんは「1つ1つのことをクリアしたい」というこだわりが強く、運動遊びの最中に「クリアできないこと」が続くと、嫌になって教室から離脱していくことが多かった。しかし、このシールラリーで「シールを集める」ということを参加する度に「クリア」することができ、運動教室を継続するという意欲が続いていたようである。このことから、子どもにとってシールラリーは「シールがほしいから」という理由だけでなく、「クリアしたい目標、あそび」というように捉えて、参加意欲につながっていることが分かった。

平成28年度のシールラリーは3回でご褒美のお菓子をプレゼントするという仕組みにしたが、この運動教室は最後に「おやつタイム」があるため、課題達成のご褒美をお菓子ではなく大きめのシールにするなど工夫したいと考えた。B君はご褒美シールに一番大きなシールを選んだ。そのシールをもらった後、周りの大人に「一番大きなシールをもらった」と、とてもうれしそうに言って回る様子が見られた。大きなシールが子どもに満足感を与えられることがB君の行動から分かった。シールを選んでいる時や好きなキャラクターについて子どもと会話することを通じ、平成29年度は子ども達の好きな新幹線をシールラリーのアイデアに取り入れ、運動教室への参加継続を促すシールラリーを行っている(写真2)。シールを貼る際に子どもと対話することで、子どもが何に関心を持っているのかを知ることができる。運動中に目を合わせて話すことがなかったC君は、シールを貼る時に初めて「僕、新幹線に乗って修学旅行に行ったよ。」と話をしてくれた。何気ない会話の中に、一人一人の学習スタイルや好きな物事が隠れており、それらを運動あそびの内容や参加の継続のヒントにしている。

このように子ども達に寄り添い、積極的に見守り、会話することで少しずつ愛着形成の輪が広がる。そして子どもも親も周りに受け入れられているという安心感を持って運動に取り組める環境づくりになってきたと考える。

保護者の意見や要望は教室を運営していく際に参考になるため、運動教室後のお菓子タイムでは、子ども達と一緒にお菓子を食べながら保護者と会話するように努めている。例えばD君のお母さんからは「D君は普段あまり会話しないので、お兄ちゃん抱っこしてといえたのは、すごいことだと思う。」というような普段とは違う成長ぶりを教えて頂いた。このようにおやつタイムの交流が子どもたち同士、保護者同士、主催者と参加者の交流の場になっている。保護者からの情報を取り入れ内容や方法に改善を重ねていくと、教室に参加する子ども達の好みや特徴をよく理解することができ、集中力継続やマナー化防止になると考えられる。また、このような交流の場において保護者に、この遊びは何のために行っているのか、運動の目的等について改めて伝えることが必要である。コラボレーション型支援体制の構築のためには、気軽にできる情報交換を毎回行うことが大切であ

ると考える。

#### (4) 運動教室参加の仕組みについての省察

子どもにとって「楽しい」と感じる事が運動を継続するためには重要である。運動教室での子ども達の様子から、子どもは少しでも「嫌だ」、「やりたくない」等と感じると、集団から離れてしまう。その原因は子どもによって様々であるため、一人一人の要望に応えるのは困難ではあるが、指導者は子どもが「楽しそう」と感じる仕組みと環境を作っていくことが大切である。

「スカーフ遊び」や「風船遊び」は繰り返し親子活動を行ってきたが、愛着のある保護者と一緒に活動することにより、子どもの表情が柔らかくなり安心して遊んでいる場面が多く見られた。愛着形成(15)はすべての成長の第一歩であり、親子だけではなく、教育環境にも大切なものであると報告されている。本研究で実践した教室のように場所や指導者、参加者が毎回変化しても、月1回を4～5回行うことで子どもたちは少しずつ環境になれることができた。このことから、あまり関わったことのない指導者といきなり遊ぶのではなく、親子活動を通して子どもがある程度、本時の環境に慣れたところで集団での遊びに取り組むという構成が望ましいと考える。

#### (5) コラボレート型支援体制の試みについての省察

第19回の活動では、自由遊びの時間に、子どもも大人も互いを認め合い学び合う場面がたくさん見られた。年長児のEちゃんは、なんでもやってみたい、がんばりたいという意欲に満ちているが、反面、上手にできなかったらどうしようという不安から、初めての活動では「やらない、これくらい」と言うことが多い。大学生のお兄さんが長縄を回し、近づいたらジャンプをするという遊びをしている時も、まさにそうだったが、Eちゃんはそう言いながらも他の子が遊ぶ様子をじっと見ていた。一方、年中児のFちゃんは、人前でのパフォーマンスが大好きで、結果はともかくチャレンジしていくタイプで、この時も、縄の動きになかなか合わせられず何度も失敗していた。すると、その様子を見ていたEちゃんが、縄から少し離れたところでジャンプをし始めた。そして、指導者がタイミングよく「そうだね、ここで練習しよう」と声をかけ、何度か練習しているうちに、自然に跳ぶことができたのである。Fちゃんも、チャレンジの甲斐があって、跳べるようになっていた。あたたかく見守っていたお母さんたちから、「やったね！できた！」という賞賛と拍手が起こり、子どもたちも笑顔で喜んだ。そのうち他の遊びをしていた子どもたちも縄のところに集まり、お兄さんと子どもたちだけで遊び始めた。

このような事例からも「人とのかかわり」に課題のある子どもたちが、子ども同士影響しあって同じ遊びの楽しさを共有している。特別支援教育の知識や経験の少な

い学生たちであるが、お兄さんやお姉さんの存在として、一緒に活動を楽しむ仲間として関わるからこそ、子ども達のチャレンジ精神を促しているのではないか。それぞれの専門を生かし協働的に支援することにより、子ども達への様々なアプローチを提案することができた。さらに、それぞれの立場から子どもの成長や取り組めた喜びを共感しあうことができるようになった。コラボレーション型支援体制の試みは、発達に気がある子どもが楽しく運動を継続するだけでなく、子ども同士影響しあって同じ遊びの楽しさを共有するコミュニケーション能力の基礎作りにも繋がるものと期待できる。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご協力頂きました保護者の皆様、参加者の皆様に感謝申し上げます。また地域のお兄さんやお姉さんの存在として子ども達と一緒にあそび、支援ツールのアイデアを考え作成して下さった富山大学の川口恵菜さん、鎌田彬さん、秦昂平さん、みなさんのお陰でコラボレーション型支援体制の試みを実践することができました。心から感謝申し上げます。

## 文献

- (1) 辻井正, 辻井明 (2011) : ちょっと気になる子供の感覚・認知(読む・書く・数える)運動プログラム .NPO 法人国際臨床保育研究所 .
- (2) 竹村哲, 澤聡美, 山西潤一 (2014) : 主体的な学びの学習観を持たせるためのコラボレーション型授業の実践 . 日本創造学会第36回研究大会論文集 . 57-60 頁
- (3) 坂爪一幸 (2012) : 発達障害の増加と懸念される原因についての一考察—診断, 社会受容, あるいは胎児環境の変化—早稲田教育評論 26 (1), 21-31. 早稲田大学教育総合研究所 .
- (4) 文部科学省初等中等教育局, 特別支援教育の概要 <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001wjus-att/2r9852000001wkgh.pdf> (2017.1.5)
- (5) 厚生労働省, 保育所における障害児の増加 . [http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/10/dl/s1006-7e\\_0003.pdf](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/10/dl/s1006-7e_0003.pdf) (2017.1.5)
- (6) 多賀城市保健福祉部社会福祉課障害福祉係 (2004) : 児童発達支援センターに係るアンケート調査結果 . [https://www.city.tagajo.miyagi.jp/shogai/kenko/shogaisha/shienschisetsu/documents/hu-si-zihatu-anketo\\_1.pdf](https://www.city.tagajo.miyagi.jp/shogai/kenko/shogaisha/shienschisetsu/documents/hu-si-zihatu-anketo_1.pdf) (2017.2.1)
- (7) 新学習指導要領体育科改定ポイント [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/29/1376580\\_2\\_2\\_6.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/29/1376580_2_2_6.pdf)
- (8) 現行学習指導要領の理念 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/)

- chukyo3/siryoy/07102505/003/003.htm
- (9) 日本幼児体育学会編集 (2009) : 幼児体育 専門 日本幼児体育学会認定幼児体育指導員養成テキスト.
- (10) 柳沢秋孝 (2002). 「生きる力」を育む幼児のための柳沢運動プログラム<基本編>.
- (11) 澤聡美, 千田恭子, 齋藤友紀, 吉田智美 (2016) 幼児の豊かな身体表現を育む環境づくり～TV番組「わーお！」の分析と活用を通して～. 富山大学人間発達科学部研究実践総合センター紀要. 教育実践研究 第11号通巻33号, 73-79頁
- (12) 療育的な運動支援・安全な預かりこどもプラス  
<https://www.ueda-kodomo.com/2016/11/21/%E5%8B%95%E3%81%AE%E6%B4%BB%E5%8B%95%E3%81%A8%E9%9D%99%E3%81%AE%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%85%90%E7%AB%A5%E7%99%BA%E9%81%94%E6%94%AF%E6%8F%B4/> (2017.1.31)
- (13) 刀根有紀, 個人研究の部特別支援教育  
 視覚的な分かりやすさを追求した学習教材の開発と実践—生活単元学習におけるプレゼンテーションソフトの活用と自作教具—  
[http://www.saga-ed.jp/shien/ronbun/pdf/sakuhin/h26/h26\\_02kojin\\_03.pdf](http://www.saga-ed.jp/shien/ronbun/pdf/sakuhin/h26/h26_02kojin_03.pdf) (2017.1.31)
- (14) 井上茂, 小田切優子, 下光輝一 (2008) : 運動指導7つのコツ, 丹水社.
- (15) BRUCE D.PERRY(2002):Childhood Experience and the Expression of Genetic Potential: What Childhood Neglect Tells Us About Nature and Nurture, Brain and Mind 3: 79-100.

(2017年8月31日受付)

(2017年10月4日受理)

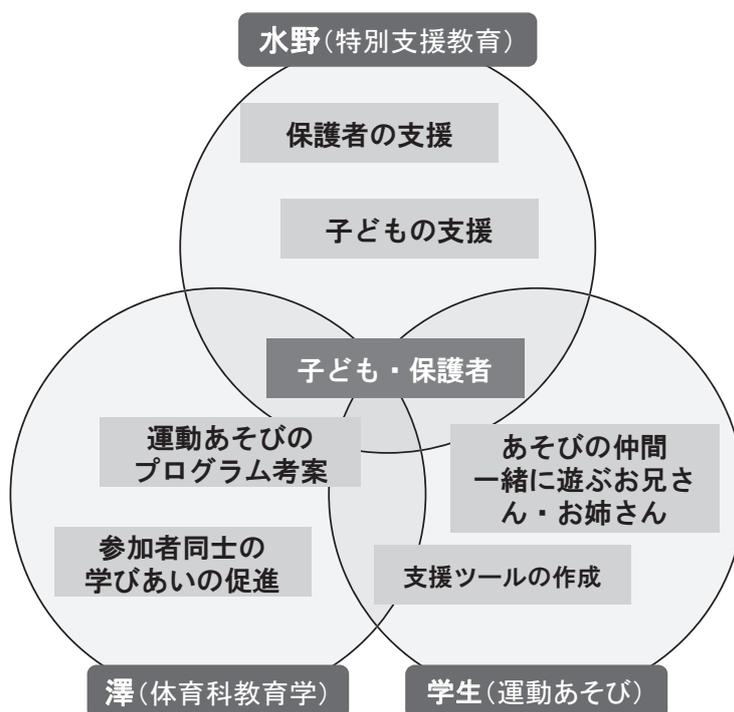


図1. Ponte 運動教室のコラボレーション型支援体制

- マット運動 → 支持力 + 平衡感覚 + 回転感覚  
 ……いぬ、くま、かえる、片足くま、ライオン、おもいもゴロゴロ
- なわ跳び → 手と足の協応力 + 跳躍力 + 動体視力  
 (なわを観る力) ……電車、カンガルー、うさぎ
- 跳び箱 → 支持力 + 跳躍力 ……かえる、カンガルー、いぬ、くま
- 鉄棒 → 懸垂力 + 支持力 + 回転感覚 + 逆さ感覚  
 ……ぶたの丸焼き、つばめ、両足抜き

図 2. 柳沢運動プログラムの内容 (柳沢, 2002 に澤が加筆したもの)

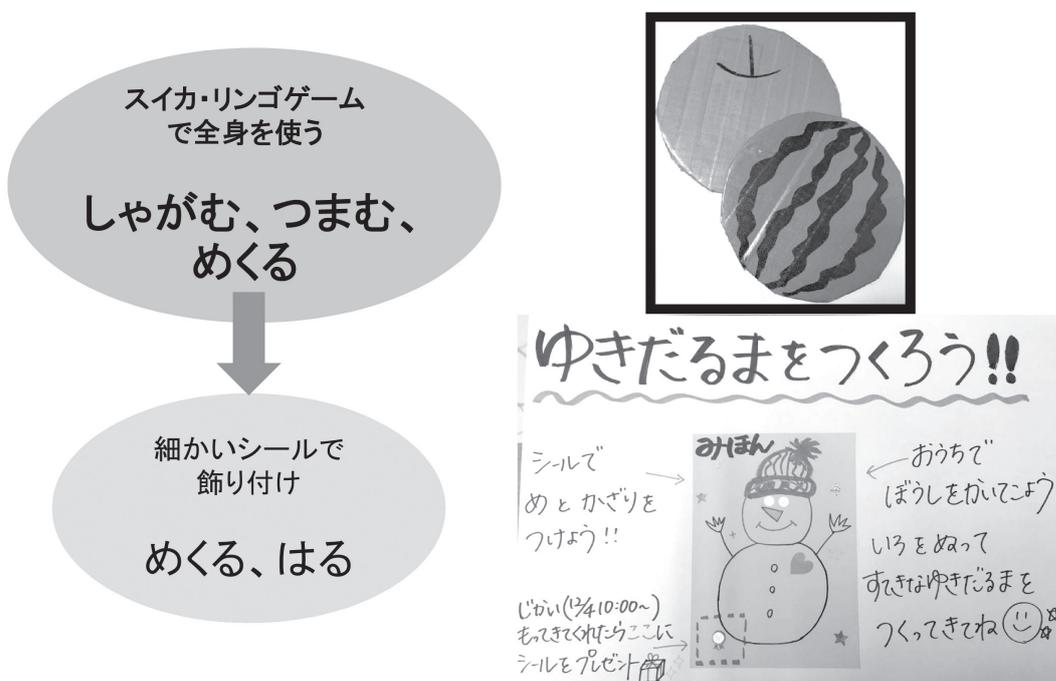


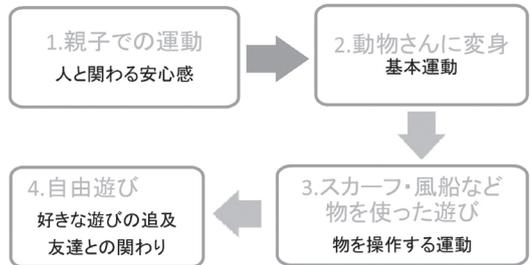
図 3. 粗大・微細運動の一例

## Ponte WAKUWAKUサークル からだとこころのプログラム

メンバー紹介 ①好きな動物 ②好きな果物 ③好きなスポーツ

 <p>さわ先生 ①うま ②イチゴ ③新体操</p>	 <p>みずの先生 ①ねこ ②グレープフルーツ ③スキー</p>
 <p>あきらお兄さん ①チワワ ②リンゴ ③器械体操</p>	 <p>こうへいお兄さん ①キリン ②みかん ③器械体操</p>
 <p>けいなお姉さん ①ペンギン ②ぶどう ③新体操</p>	<p>？ ゲストのお兄さん、お姉さん 何が好きか聞いてみよう！</p>

### 運動遊びの流れ



### 教室のねらい



左のバケツは、バケツ理論と呼ばれるものです。子どもの知能は乳児期からの運動と共に成熟します。学習の土台となる技能や社会性を楽しい運動遊びを通して身につけていきましょう。

プログラムは、はだしで行います。  
動きやすい服装で来てね。  
月に1~2回、運動が大好きな私たちと  
楽しく体を動かそう！  
親子で体も心もリフレッシュ☆



写真 1.Pnte 運動教室チラシ

## 基本運動「どうぶつ歩き」の工夫



図 4. 動物の絵を描いたパネルの活用

○すきはキャラクター○

---

○すきはおかし○

---

うんどうきょしつにくると、  
シールがもらえるよ!!

		
1	2	3

シールがぜんがてまてめおしえてね!!

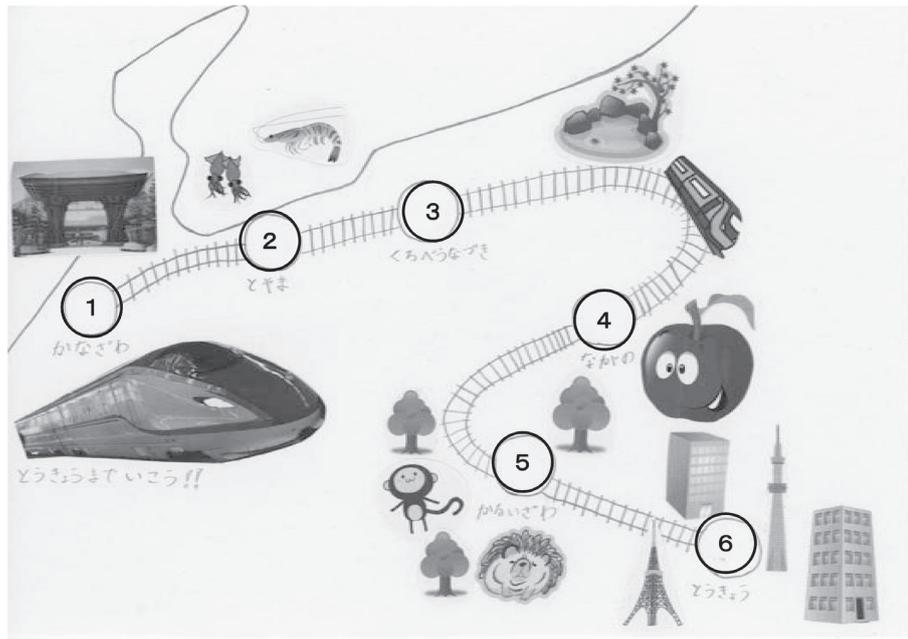


写真 2. シールカード



写真 3. 子どもが作った動物パネル